

【研究掌記】

『玉勝間』第三卷「こたつといふ物のうた」について

膽 吹 覚

『玉勝間』は江戸時代中期の国学者、本居宣長の隨筆集である。その第三卷に「こたつといふ物のうた」と題する掌編が掲載されている。短い作品であるので、その全文を左に掲げる。なお、管見に従えばこの一篇を取り上げて考察した論文はないようである。

こたつといふ物のうた

しはすばかり、これかれあつまりて、埋火を題にて、歌よみける日、今の世のこたつといふ物をよめと、人のいひければ、

むしぶすまなごやが下にうづみ火にあしさしのべ
てぬらくしよしも

とよめりければ、みな人わらひてやみぬ

十二月の或る日、宣長をはじめとして数名の人たちが集まって歌会を開いていた。この日の歌題は「埋火」であったので、出席者の一人が、現代の「こたつ」という題で歌を詠むように宣長に求めた。宣長は即興で「むしぶすま」の一首を詠んだ。すると、この歌を聞いた人たちはみな笑って、次の話題に移っていったと『玉勝間』には記されている。

宣長が即興で詠んだ「むしぶすま」の歌は、彼の歌稿である『石上稿』第十七「寛政四年壬子詠草」に次のように収録されている。

埋火を題にて人々と歌よみける時に、今の世のこたちといふ物をよめと或人のいひけ

れば、

むしふすまなこやか下にうつみひにあしさしのへてぬ
らくしよしも

『石上稿』の詞書と前掲の『玉勝間』の文章を比べると、
宣長が『石上稿』の詞書に少し修正加筆して『玉勝間』の
文章を成したことが知られる。また、和歌の本文は漢字仮
名の表記の相違点はあるが、本文としては同一である。ま
た、この詠草によって、宣長が「むしぶすま」の一首を詠
んだ時期が、寛政四年（一七九二）十二月であったことが
知られる。寛政四年は、宣長は六十三歳の年にあたる。こ
の年の十二月三日、宣長は紀州藩に召し抱えられ、松坂在
住を許可された上で五人扶持を与えられている。また、同
月十一日には『古事記伝』第三十四卷第四章段が成稿して
いる。この時期の宣長は、国学者として公にも認められ、
彼の名著と言うべき『古事記伝』の執筆も着実に進行して
おり、国学者としてはおおむね充実した日々を送っていた
ようである。『玉勝間』第三卷「こたつといふ物のうた」
に描かれた歌会の和やかな雰囲気は、こうした彼の当時の

研究生活とも重なるものである。

寛政四年（一七九二）十二月の歌会の席で、宣長に示さ
れた「こたつ」という題は、伝統的な和歌の世界では、勿
論、歌題として存在しない。『玉勝間』にも「今の世のこ
たつ」と改めて記されている通り、「こたつ」は当代的
（近世的）なものであった。この日の歌会の出席者の一人
が、当日の歌題であった「埋火」から着想を得て、興に乗
じて、遊び半分で宣長にその詠歌を求めたのである。近世
のこたつは爐の上に櫓を設け、そこに布団をかけたもので、
形状としては今日のこたつにほぼ近い。

さて、宣長の「こたつ」を詠んだ歌は、『古事記』上巻
で須勢理毘売命が大国主神（八千矛神）に贈った長歌を踏
まえて作られていると考えられる。宣長の『古事記伝』第
十一巻から須勢理毘売命の長歌を左に引用する。

夜知富許能。加微能美許登夜。阿賀淤富久邇。奴斯許
曾波。遠邇伊麻世婆。宇知微流。斯麻能佐岐邪岐。加
岐微流。伊蘇能佐岐淤知受。和加久佐能。都麻母多勢
良米。阿波母與。賣邇斯阿禮婆。那遠岐弓。遠波那志。
那遠岐弓。都麻波那斯。阿夜加岐能。布波夜賀斯多

爾。牟斯夫須麻。爾古夜賀斯多爾。多久夫須麻。佐夜
具賀斯多爾。阿和由岐能。和加夜流牟泥遠。多久豆怒
能。斯路岐多陀牟岐。曾陀多岐。多多岐麻那賀理。麻
多麻傳。多麻傳佐斯麻岐。毛毛那賀邇。伊遠斯那世。
登與美岐。多三麻都良世。

大國主神の妻、須勢理毘売命はとても嫉妬深い女性であつたので、大國主神は出雲国を出て、大和国へ旅立とうとした。右の長歌は、夫の旅立ちを思い止まらせようとして、須勢理毘売命が詠んだ歌である。愛しい大國主神よ。あなたは男なので、行く先々で妻をお持ちになることでしょう。しかし、私は女ですから、あなたの他に男はおりません。綾織の帳のふわふわと揺れる下で、絹の夜具の柔らかな肌触りの下で、楮の夜具のさやさやと音を立てる下で、若くて柔らかな私の胸を、白い腕を抱いて、その手を私の背中に回し、玉のように美しい私の手を枕にして、足を伸ばしておやすみなさいませ。さあ、このお酒を召し上げられ。須勢理毘売命のこの歌は愛する夫への懇願であり、そこには夫婦間の愛情が詠われている。

宣長の歌と須勢理毘売命の長歌を歌語の視点から見ると、まず、宣長の「こたつ」を詠んだ歌の初句と第二句「むしぶすまなごやが下に」は、須勢理毘売命の長歌の傍線部①「牟斯夫須麻。爾古夜賀斯多爾」に対応すると考えられる。「牟斯夫須麻」は暖かい蒲団という意味で、「古事記伝」に「牟斯夫須麻は烝被にて、暖なるよしの称なり」とある。そして、「爾古夜賀斯多爾」は柔らかな蒲団の下に、という意味である。なお、「なごやが下に」と「爾古夜賀斯多爾」の相違については、宣長が『古事記伝』に「爾古夜賀斯多爾は柔之下になり、爾古夜は、爾古夜加なるを、加を省るは、中巻に煩曾多和夜と云るも、細多和夜加なると云ことなるに准ふべしと、契沖云き、万葉四【十九丁】に、烝被奈胡也我下丹雖臥、【契沖云、此烝被を、昔より阿都夫須萬と訓るは、今の御歌に依るに、誤なり、さて爾と那と通へば、二句今と全同じ、】と記しているとおりである。

次に、宣長の歌の下句「あしきしのべてぬらくしよしも」は、須勢理毘売命の長歌の傍線部②「毛毛那賀邇。伊遠斯那世。」に対応すると見てよいであろう。「毛毛那賀邇」は足を伸ばしてという意味であり、「伊遠斯那世」は寝なさ

いという意味である。『古事記伝』には「伊遠斯那世は、寝を宿よと云ことなり、斯は助辞、那世は前歌の那佐牟と同言なるを、此は寝よと云意なる故に、世とは云るなり」と記されている。

このように宣長の「こたつ」を詠んだ歌は『古事記』上巻の須勢理毘売命が大国主神に贈った長歌を踏まえて作られていることは明らかであろう。なお、「むしぶすまなこやが下に」という歌語の用例は、前掲の須勢理毘売命の長歌以外には、『万葉集』第四卷相聞の五二七番歌に、「京職藤原大夫贈大伴郎女歌」と題して、「蒸食奈胡也我下丹雖臥与妹不宿者肌之寒霜」とある。この歌にはしかし、宣長の「こたつ」を詠んだ歌の下句に対応する歌語が見られない。ゆえに、宣長の「こたつ」を詠んだ歌の直接の典拠は『古事記』上巻の須勢理毘売命が大国主神に贈った長歌に求めるのが適当であろう、と私は考えている。

それでは最後に、宣長の「こたつ」を詠んだ歌が『古事記』上巻の須勢理毘売命が大国主神に贈った長歌を下敷きにして作られていることを踏まえて、あらためて宣長の歌を考えて見たい。

『玉勝間』第三巻「こたつといふ物のうた」について

この歌の大意は、暖かく柔らかなこたつ布団の下にある埋火に足を伸ばしておやすみなさい、といったところであろう。こたつの中で足を伸ばして横になっているのはおそらく男性であり、この歌には描かれていないが、その男性を優しく見守り、「あしさしのべてぬらくしよしも」と語りかける女性がいる。宣長はこの女性の立場からこの歌を詠んでいるのである。そして、こたつに入って横になる男性には大国主神の姿が、彼を見守る女性には須勢理毘売命の姿が、それぞれの重ねられていることは言うまでもない。

寛政四年十二月の歌会の席で、「こたつ」という題を与えられた宣長は、一見すると恋愛とは無縁の当代的な暖房器具である「こたつ」に、『古事記』に載る須勢理毘売命の長歌の世界を重ねることで、「こたつ」を詠んだ歌から一步進んで、「こたつに寄する恋」を詠んだ歌に仕上げた。その手際の良さは、同席した人たちが「みな人わらひてやみぬ」というほどであった。この時の宣長は、さぞかし上機嫌であったことであろう。

このようにして詠まれた「むしぶすま」の一首であるが、宣長の歌集である『鈴屋集』にこの歌は収録されていない。

それは「こたつ」という題も然ることながら、この歌は如何に『古事記』を踏まえて古風に整えられた歌であつても、

やはり伝統的な和歌の世界では通用する作品ではない、と宣長が考えたからではないだろうか。しかし、宣長にとつてこの一件は極めて興味深い出来事であり、このまま捨て去るには惜しいと思つたのであろう。彼は「むしぶすま」の歌の後に「とよめりければ、みな人わらひてやみぬ」と加筆することで、これを歌会での逸話に仕立て直して『玉

勝間』に収録したのではなからうか。私はそう推測している。

〈付記〉

本稿に於ける宣長の著作の引用はすべて筑摩書房版『本居宣長全集』に拠つた。また、『万葉集』は『新編国歌大観』第二卷より引用した。

（福井大学准教授）